ART KISS LETTER

Contemporary Art Museum, Kumamoto

FOR KUMAMOTO

ART PEOPLE

vol. 15

2002.9.15 熊本市現代美術館発行

Photo by TAKESHI MATSUNAG

2002.7.1～7.31のギャラリー展評

〔アート・ド・ギャン〕 ART DE GYAN

※もう、おわかりですよね！熊本弁で「アート、どう？」の意です。

きのものや

熊本市坪井2-6-4　☎346-9429

● 7月1日にリニューアルオープンしたきのものや。きのものやのコンセプトにぴったりの昔ながらの家屋に、出原の《手水鉢》や、石崎大徳さんの《笑み地蔵》がお出迎え。古布で作った団扇型のブローチなど、夏に楽しい小物も並ぶ。(H-T)

画廊喫茶三点鍾

熊本市手取本町3-8有明ビル　☎326-3040

● **「小松慎平　球面の植物たち展」**(7.1～7.10)一私にとって植物たちは宝石です一と案内状にあるとおり、繊細なタッチの美しい水彩画。

● **「きれいな川・河童展」**(7.11～7.20)色紙、面、置き物、うちわ、Tシャツなど河童をモチーフにしたさまざまな表現が楽しい、三点鍾恒例の展覧会。(K-T)

● **「第九回巻覧会及び阪神大震災チャリティー作品展」**(7.21～7.31)

島田美術館ギャラリー&島田美術館蔵寸龍窟

熊本市島崎4-5-28　☎352-4597

● **「染彩布展」**(7.4～7.15)中村静香さんの和服生地による創作。服、袋物、人形など、変幻自在な布に魅了される。特に南瓜、玉葱などの野菜を象った掛け物は、京友禅を使い、布の模様を絶妙に配した傑作。

● **「私たちの個展　心地よい住まいづくり」**(7.19～7.29)建築事務所コンフォートikiによる建築、空間デザインの提案。実際に空間を体験できる展示でないのが残念だが、写真だけでも十分その居心地のよさは伝わってきた。大森泰二郎さん制作の照明も独創的で効果大。(K.K)

喫茶りんどう

熊本市水前寺6-18-1熊本県庁本館1F　☎383-1111(内線5856)

● **「熊本こすもす画展」**(7.1～7.31)絵画、マグネットクリップ、かぶとむしの幼虫を展示。久富正明さんによる絵画は筆使いも力強く、確かな色彩感覚をアピールしている。(H-T)

画廊喫茶南風堂

熊本市北千反畑町5-13宅建ビル1F　☎343-9664

● **「宮崎昌子　洋画展」**(7.1～7.10)では、油絵の静物画の深みのある色使い、水彩の風景画には開放的な空気を感じ取ることができた。

● **「小泉八雲イメージ画展」**(7.11～7.20)は9名が、八雲の作品に漂う妖気を表現しており、原口邦子さんの《深く潜(ほり)さげた絵画…であるか？》ではMUJINAのテキストが書き込まれており、多層な空間を感じさせる。

● **「第5回裸婦展」**(7.21～7.31)は14名が出品。松山サダ子さんの描いた裸婦は、鮮明な色彩が躍動感を力強く表現していた。(Y.H)

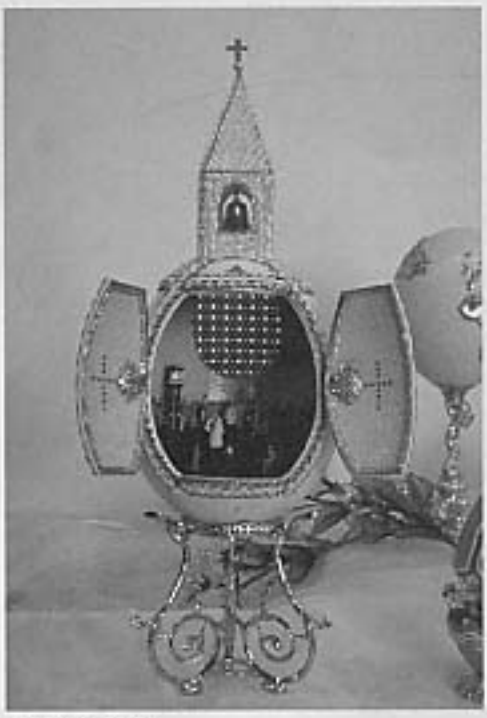
ギャラリーキムラ

熊本市水道町3-5(上通Kビル6F)　☎327-0166

● **「草間彌生・版画展」**(7.1～7.7)

● **「『石田比呂志全歌集』『第13歌集者狼』出版記念色紙展」**(7.8～7.21)短歌結社「牙」を主催する石田さんの、自作をしたためた色紙展。

● **「Fancy egg art展Again」**(7.22～7.31)「エッグ・アート」とは、中身を抜いた卵の殻にペイントや装飾を施したもの。はかなくも華麗な衣装をまとった卵たちには、作者の犬童畔さんの愛情が込められ、豊かな気持ちにさせられる。(A・S)



犬童畔さんの作品

上通郵便局プラザU

熊本市水道町3-37-1F　☎326-4123

● **「宏道流いけばな展　新世代えのメッセージ　温故創生」**(7.4～7.6)「生花」と「新花」おりまぜての展示。

● **「海へ…展」**(7.10～7.14)ブルーアース21所属のダイバー達の写真展。あそびたゆたう海の生き物の活き活きとした様子を写す。

● **「山面フェスティバル展」**(7.15～7.23)ふるさと切手発売を記念するイベント。服部秋彦さんによる絵葉書の原画展示も行われた。

● **「草心流・野の花いけばな展」**(7.24～7.30)前期・後期に分けての展示。竹竜なども用いて、野の花の可憐さに涼しい表情を持たせている。(H-T)

熊本岩田屋六階美術画廊

熊本市桜町3-22　☎322-1111

● **「小川洋一「陶」展」**(7.2～7.8)

● **「近代日本画作品展」**(7.9～7.15)

● **「辻毅彦、聡彦父子作陶展」**(7.16～7.28)

● **「谷川泰宏展」**(7.23～7.29)

アートスペース大宝堂

熊本市上通5-6　☎354-2155

● **「川口かおるパッチワーク教室　4thキルト作品展」**(7.3～7.8)婦人雑誌等でキルト王国として知られる熊本。そのキルターのレベルの高さを感じさせる展示だった。廣瀬和代さんの《アボンリー小学校-赤毛のアンより-》には確かな画面構成力を、宮田裕子の《山あいの滝》には自在なイマジネーションを強く感じた。(H-T)

● **「第16回花の会熊本支部写真展」**(7.10～7.15)では熊本花の会会員の19名が発表。光と影のコントラストを生かした作品が数多くみられた。(Y.H)

● **「島田樟蔭卒寿記念回顧録と社中展」**(7.17～7.22)在熊の長老書家・島田樟蔭さんが九十歳を迎え、回顧を含めて開いた記念展である。卒寿とは思えないしっかりとした近作も、荘重(そうじゅう)にして迫力ある屏風作品も、若い頃からの着実な研鑽(けんさん)の積み上げがさすがと頷(うなず)ける。

島田樟蔭さんの作品

● **「第2回玄泉書道会全国チャリティー成家・師範展」**(7.24～7.29)在熊書家沖川草径さん主催の玄泉書道会が、幹部が揮毫(きごう：書画をしるすこと)した色紙の展示販売で福祉事業に役立てようと開いたチャリティー展である。会長の頑張りが目立っていたが、作品の様式に今一つ変化が欲しいと思う。一社中の催しだから作品傾向が似るのはやむを得ないであろうか。

● **「第２５回養心書道展」**(7.31～8.5)養心書道会(浦川草径会長)が、２５回展を記念して、古典の臨書に取り組んだ書道展である。古典の選択は各自の意志によったそうで、我が国平安期の元永本古今和歌集や江戸期の良寛、大雅、独立(どくりゅう)以外はすべて中国歴代の古典に挑戦しており、題材には変化が見られた。(T・M)

画廊喫茶ぷらうん

熊本市花畑12・15　☎３５２・８８５５

● **「中村渓写真展　表情」**(7.15～7.31)会場に入ると、16人の女性の微笑に囲まれる。奇をてらうことなく、オーソドックスにとらえたその表情はどれも優しい。(A・S)

アートルーム　イケオ

熊本市新市街6・6　☎３２４・１４１４

● **「夏の出会い　from金沢　谷口真理子作品展」**(7.3～7.7)熊本出身で金沢在住の谷口さんの彫金の展示。彫金工芸の伝統を持つ熊本と金沢の土地に縁を持ち、洗練された作品に伝統を反映させている。アクセサリーから置置きまで、造形力とマッスの扱い方には隙がない。(H・T)

● **「baby romp」**(7.17～7.22)津田一美さん、野口真紀子さん、松村里香さん、溯口恵子さん、元村倫芳さんによる絵画ありイラストあり活花？!ありの作品展。楽しんで色を使っているのがうかがえるイラストや思わず微笑んでしまうようなキャラクターに合わせて、敢(あ)えて水を使わず葉の線の面白さを強調した活花とが生み出す空間は、まさに展覧会名のromp(英:はしゃぐ)さながらに、楽しい雰囲気をかもし出していた。(E・Z)

野口真紀子さんの作品《deteRmine》

四季の彩

熊本市上通4・10トラヤビル　☎３５１・８３３２

● **「四季の彩企画　熊る三人展」**(7.1～7.14)は、梅原啓子さん、川崎栄子さん、佐藤道代さんの展覧会。花、静物、風景など12点が並ぶ。川崎さんの「初夏」からは爽やかな光が感じられた。

● **「四季の彩企画　夏便り三人展」**(7.16～7.31)佐方雅昭さん、福留皓士さん、山口正和さんの展覧会。三人とも、何らてらうところのない率直な筆致が画面にさえる。(K.K)

ギャラリーカフェ　ブリランテ

熊本市桜木2・14・5　☎３６９・００９５

● **「和田ゆみ子・水彩アート作品展」**(7.16～7.31)バラやレモン、さくらんぼなど、みずみずしさや透明感を大切に映しとっていた。(H・T)

県立図書館

熊本市出水2・5・1　☎３８４・５０００

● **「熊本市立楠中学校作品展」**(7.4～7.15)

● **「高校生読書感想画コンクール」**(7.16～7.28)県下の高校生による、自分の思いを丁寧に描きこんだ力作が揃う。(A・S)

熊本伝統工芸館

熊本市千葉城町3・35　☎３２４・４９３０

● **「桐材の温もりと桐単箪笥の実演and手作り展」**(7.2～7.7)松本総桐単箪笥店の作品展。単箪笥から団扇、下駄まで幅広く桐材の魅力を紹介。

● **「ボトルフラワー花の精展」**(7.2～7.7)堤咲子さんによる、瓶詰的に乾燥させた花のブーケ(ワイングラスサイズからテーブルセンター用サイズまで)が並ぶ。艶やかな出来映えに色あわせのセンスの良さが表れる。

● **「萩焼展示会」**(7.2～7.7)花器、茶道具など、萩焼の素朴で温かな釉の好ましさを充分に活かしている。(H・T)

● **「手愛(陶・革)二人展」**(7.9～7.14)は、永田英子さんによる、かわいらしい人形をあしらった陶芸作品と、林祐子さんによるバッグ、アクセサリー、小物などの多彩な革作品。

● **「夢造い展」**(7.9～7.14)では福岡県の４名の方が古布(かすり・着物)を用いた洋服や、帽子、ビーズ、革などを出品。

● **「松竹浣哉作陶展」**(7.10～7.14)では、小石原・上野焼の窯元で学び、菊池に窯を持つ松竹さんが皿・鉢・瓶を発表。均整のとれたフォルムとヴァリエーション豊かな透明感を備えた青い釉薬の作品が独自の世界を表現していた。

● **「宮崎県綾町ひむか器工芸展」**(7.9～7.14)は、昨年と同じ９名の陶芸、木工などの作品展。

● **「備前焼　太田富夫作陶展」**(7.16～7.21)では、伝統の手法に映える、洗練された造形の器だった。

● **「游ーガラスと流木アートー」**(7.16～7.21)はガラスの一鬼幸恵さんと流木アートの高木敬二さんの作品展で、柔らかな息づかいを感じさせるガラスの作品と、年月を経た流木の曲線が互いを優しく包んでいるようであった。

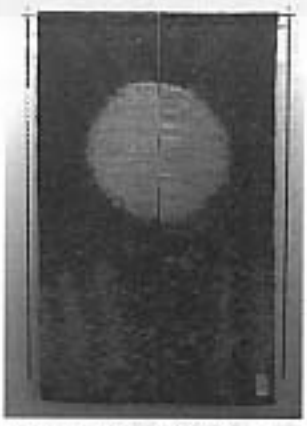
一鬼幸恵さんの作品

● **「"かご展"ラタンバスケット・い草と遊ぶ」**(7.16～7.21)は、今村紀代子さんの個展。い草との異なる素材感を生かしたデザイン、あるいはシックな色彩に染めあげられたラタンの大小のかごは、用途が多彩で、そこから新しい行動を起こしてみたくなる夢がふくらんだ。

● **「八女手民　木・土・硝子とあかり展」**(7.16～7.21)では、大胆なフォルムに豊かな質感の紙を用いたあかりが目を引いた。

● **「第15回渋うちわ書画展」**(7.23～7.28)では、うちわのデザイン、あるいは透かして楽しむ骨のカットに意匠をこらしたもの、障害者の方によって色とりどりに編み上げられたものなど、20名の方の多様なうちわが並び、外の暑さをひととき忘れさせた。

● **「薩摩陶器　染色藍展」**(7.23～7.28)は鹿児島に住む三反田豊さんの薩摩焼と、豊美子さんの藍染は、どちらも、鮮やかさを保ちつつ、溶け込んでいく色彩という点で調和が見られた。



三反田豊美子さんの作品

● **「五福公民館自主講座押し花アート」**(7.24～7.28)では元田千代さんのもとで月に２回押し花を学んでいる方々が発表。小学生から80代の方まで、花に向かい、楽しみながら構図を考えている姿が、作品から明るく伝わってきた。

● **「熊本のガラス工房展８人と川尻六第匠展」**(7.30～8.4)は、菓子博のプレイベントも兼ねており、和菓子制作の実演や、ガラスの器と四季を演出するディスプレイを作り上げていた。

● **「2002熊本のクラフト」**(7.30～8.4)は熊本県文化懇話会クラフト部門の作品展で、今回は42名が出品。フラワーデザインをはじめとし、ステンドグラス、刺繍など華やかな作品が会場を満たした。

● **「茶陶展」**(7.30～8.4)は土屋煌左衛門さんの金峰窯築窯15周年記念展で、多種の味わい深い作品が並んだ。(Y.H)

ジェイ

熊本市大江本町6-9(味噌天神電停前)　☎372-8732

● **「第五回墨に慰せられて　水墨画探求展」**(7.1～7.11)
● **「アートグループPetit Dream涼しい作品展」**(7.12～7.21)展覧会のタイトル通り、日中の酷暑を忘れさせるような河童のイラストレーションや藍染め、ガラス器や風鈴、天草パールのアクセサリーなどが並んだ。
● **「火曜会7人展」**(7.22～7.31)水墨・油絵などメンバーそれぞれ思い思いの作品が展示された。(A・S)

IRISギャラリー

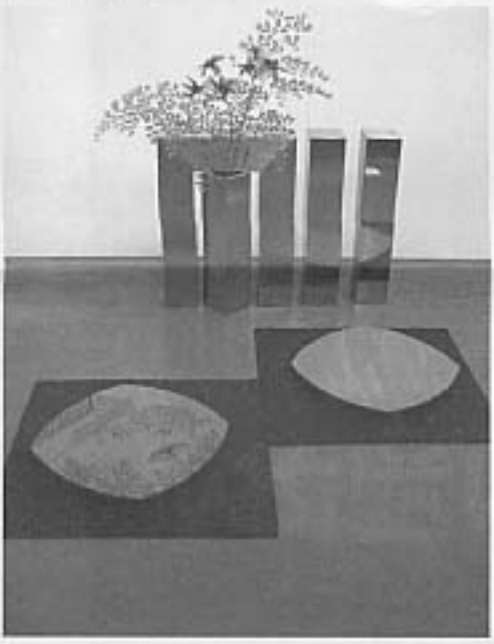
熊本市上通町2-17びぷれす熊日会館7F　☎325-1666

● **「神山明子「四季の原色押花アート展」」**(～7.5)カーネーション(母の日)やアジサイ(梅雨)など季節感を感じさせる花材を使った押花展。《乙女の愛》はアジサイを素材としているが、神山さんの豊かな色彩感覚が充分に示されていた。(H・T)

鶴屋本館8階美術ギャラリー

熊本市手取本町6-1　☎356-2111

● **「峰松忠二郎作展」**(7.3～7.9)金属板に写真を焼いた、モノクロ作品。パリの風景などをモチーフにし、芳醇なノスタルジーが漂う。
● **「中村宗哲展　哲公開展一漆氏十二ヶ月一」**(7.10～7.16)千家十職塗師十二代宗哲さんと公子さん(彫刻)公美さん(漆芸)公紀さん(陶芸)の母娘四人展。それぞれの作品が、テーマである漆氏物語の作品世界を支え、典雅な光景を作り出した。



《中村宗哲展哲公開展一漆氏十二ヶ月一》展示風景

● **「佐間田敏夫油絵展」**(7.17～7.23)「旅行屋、と言われるんですよ。絵は旅のついでに描く」と笑う佐間田さんは、今年80歳。若く見えるのは旅と絵を楽しんでいる証拠だろう。沖縄の風景を描いた作品の、美しい光が心に残った。
● **「絢爛たる彩・Glass－中野良広ガラス工芸展」**(7.24～7.30)アール・デコ調のガラス工芸作品展。「キキョウ紋花瓶」など研ぎ澄まされた構図と描写に本領が発揮されているようだ。(K.K)

鶴屋東館8階ふれあいギャラリー

熊本市手取本町6-1　☎356-2111

● **「フラワーペインティング2002　スタジオMIWA教室展」**(7.3～7.8)大倉美和さん主宰スタジオMIWAによる、トールペインティング(板絵)の展覧会。
● **「フォークアートを暮らしに　アッセンデルフト作品展」**(7.10～7.16)
● **「第4回熊本厚生年金会館フォトサークル写真展」**(7.10～7.16)
● **「第36回熊本県小品美術展」**(7.17～7.21)
● **「神様と私たち　写真コンテスト入賞作品展」**(7.20～7.28)熊本県神社庁主催。神社祭りの様子など、力作が揃った。
● **「平成13年度熊本県統計グラフコンクール入選作品展」**(7.20～7.26)
● **「きくちの四季フォトコンテスト作品展」**(7.29～8.5)
● **「熊本兵団壊滅の島　ブーゲンビル島遺品と写真展」**(7.29～8.5)遺骨の収容に訪れた記録の展示。(K.K)

ギャラリー萌

熊本市水前寺6-27-20　☎383-7001

● **「野口正幸個展」**(7.1～7.31)福岡出身の野口さんの個展。一筆を丁寧に描く好ましさと、装飾的画面に走り過ぎない抑制の強さを感じる。これからの展開が楽しみである。あわせて橋本隆喜さんの作品なども展示された。(H・T)

熊本県立美術館分館

熊本市千葉城町2-18　☎351-8411

● **「第5回道美塾写真展」**(7.2～7.7)総勢67名の自己表現が会場を埋め尽くす。池田清恵さんの作品は洗練された構図の中に、少女たちの成長を温かくみつめるまなざしにあふれていた。

池田清恵さんの作品

● **「第6回春芸林展」**(7.2～7.7)中国水墨画・彩墨画のグループ展。精緻な描き込みが特徴的な力作が揃った。
● **「第14回日本水彩熊本支部展」**(7.2～7.7)風景や花を描いた作品群。宮田梅子さんの《レモンの実》は、うっそうと茂る葉陰にたわわに実ったレモンを力強いタッチで描いていた。
● **「伊藤和代個展一生誕地」**(7.2～7.7)ゆるく溶いた油絵の具の艶やかなエナメル質が、原初の混沌(こんとん)を感じさせ、強く触感に訴える。より厳しく純度の高い表現への可能性をもち、次作が非常に期待できる。
● **「ECO展」**(7.9～7.14)
● **「臨川水墨画協会展」**(7.9～7.14)
● **「第13回雄会日本画展」**(7.9～7.14)
● **「第5回日中友好連合書展」**(7.9～7.14)中国、広東省の広州、佛山、東莞、肇慶市と書道交流会をもつ国際文化交流会が21人で37点を筆や軸で展示した。中国の書家はオーソドックスであるが、変化に富む作もある。尾崎邑鶴さんはじめ森山淡草さん等が出品している。特に作品の釈文がわかり易くて親る人に親切で良い。(S・K)
● **「第65回記念銀光展」**(7.16～7.21)分館全体に240点が並ぶ。坂本喜代子さんの《裸婦》は、力強い肉体の量感とシンプルな色彩、構成が光る。
● **「絵画グループ画楽多展」**(7.23～7.28)四季折々の季節感あふれる油絵・水彩などが並んだ。
● **「第22回美術文化熊本支部展」**(7.23～7.28)黒部迪子さんの《NON-TITLE》は、モノトーンを基調に、洗練された緊張感ある画面を作り出していた。
● **「永目貴裕個展」**(7.23～7.28)「ナポレオン」「モンスター」「青春」「平和」シリーズなど、永目さんが追ってきたテーマを概観できる構成。訥々(とつとつ)と語りかけるようなタッチの奥に、作者の生への欲望が込められている。
● **「第16回ＫＰＳ写真展」**(7.23～7.28)熊本県広告写真家協会会員による課題・自由作品。緒方司さんの《Water》、服部和洋さんの《菊池川》は、それぞれデジタル、アナログの良さを生かし印象深い。(A・S)
● **「第22回兼城昌山とそのグループ展」**(7.30～8.4)県書道連盟理事長の兼城昌山さんが、ＮＨＫ漢字書道教室、熊日生涯学習グループ、熊本市女性センターおよび中央公民館の書道講座の受講者を指導した成果を発表した書道展である。私塾とは違った制約の中で、東京書道会展や毎日書道展に出品した会員の大作には、見応えのある作が多かった。(M・T)

ギャラリー喫茶去

熊本市千葉城町3-7　☎359-0132

● **「田代晃三個展」**(7.9～7.21)様々な女性を描いた人物画(具象)と、ジャズをモティーフにした抽象画を展示。抑えた表情の女性を描きつつも、各個人の気質を感じさせる。(H・T)

熊本市現代美術館開館記念展Vol.1［熊本国際美術展］

アティテュード2002

ATTITUDE 2002

心の中の、たったひとつの真実のために

2002年10月12日㊏→12月8日㊐

熊本市現代美術館開館記念展第1弾「熊本国際美術展：ATTITUDE2002－心の中の、たったひとつの真実のために」を開催します。

「ATTITUDE」とは日本語で「態度」を意味します。この展覧会は、日本を含め世界12カ国、28名と4グループのアーティストたちによる表現の態度に焦点を当てようとするものです。

◎開館時間：10:00～20:00（入場は19:30まで）◎休館日：火曜日（但し10月15日は開館）
◎入場料：大人1000円（800円）／高校・大学生700円（600円）※（　）は前売および20名以上の団体料金
中学生500円（400円）／小学生300円（200円）※（　）は20名以上の団体料金

エネ・リス・センパー（Linked Room）2000
（囲められた部屋）2000

ナノベケンジ（アトムカー）1998

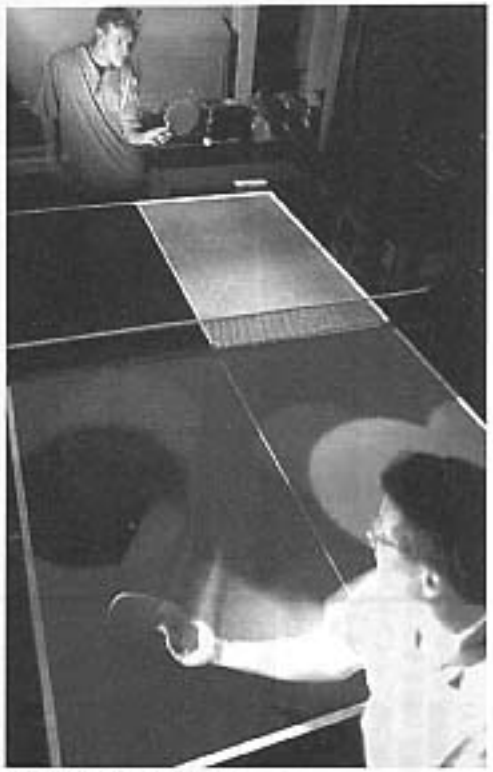
いつもここから

11/23(祝) ライブ決定!

One Truth in Your Heart

吉野辰海（大直）1992

ピーター・サーキシアン（Diver）1989
（ホーヴァー）1989



石井裕（ピンポンプラス）2002

◎参加作家

マリーナ・アブラモヴィッチ（アムステルダム）、サーニャ・イヴェコヴィッチ（ザグレブ）、石井裕（ボストン）、いつもここから（東京）、スーザン・ヴィクトール（ブルーマウンテンズ）、大原美子（福岡）、岡山直之（熊本）、菊畑茂久馬（福岡）、草間彌生（東京）、アンドレアス・グルスキー（デュッセルドルフ）、リュドミラ・ゴルロヴァ（モスクワ）、ピーター・サーキシアン（サンタフェ）、嶋田美子+BuBu（千葉、京都）、ウィンカ・ショーニバレ（ロンドン）、エネ・リス・ゼンパー（タリン）、田中功起（東京）、ジェイムズ・タレル（フラッグスタッフ）、太郎千恵蔵（長野／ニューヨーク）、殿敷侃（天国）、ジュン・グエン・ハツシバ（ホーチミン）、堀浩哉+ユニット00（東京）、ミロヴァン・マルコヴィッチ（ベルリン）、宮島達男（茨城）、ヤノベケンジ（京都）、クンビョン・ユック（ソウル）、吉野辰海（秩父）、シューミン・リン（ニューヨーク）、遠藤邦江（熊本）、伊藤隆哉、藤岡祐機、渡邊義紘（熊本県立熊本養護学校）、熊本県立熊本養護学校高等部

SUITOTTO*KUMAMOTO

連続インタビュー　NO.14

文学研究者・俳人

今村潤子さん

Junko Imamura

この連載では、熊本にお住まいで、様々なジャンルで活躍されている方々に、活動によせる熱い思いを語っていただきます。第14回目は文学研究者・俳人の今村潤子さんにお話を聞きました。

略歴／尚絅大学文学部教授、前熊本県教育委員長。専門は近現代日本文学。著作に『川端康成研究』(1988)、『中村汀女の世界―勁健な女うた』、(2000)、句集に『子別峠』(1997)などがある。

―― 近現代日本文学がご専門で、川端康成を研究されていますね。川端文学の魅力についてお聞かせください。また、三島由紀夫はどうですか。

今村：川端康成の魅力は、彼の生きた激動の時代にもかかわらず、ものの考え方や人生観が偏っていないということですね。実際にはさぞかし生きづらかったと思います。でも何ごとにもこだわらず自らの信念で「いいものはいい」と自らの道を歩んだ彼の生き方にはある種の強さがあります。それに、何よりも日本語を大事にしている。行間を読む楽しみ、そこから生まれるひろがりもありますね。ノーベル・アカデミーのエステルリング博士が「川端の文学は俳句的だ」と指摘していますが、いらないものをそぎ落とした、言葉のエッセンスを非常に大事にしていますね、そこも魅力です。川端とは師弟関係にあった三島由紀夫とは同質の部分もあって興味を持っています。川端との比較において三島の美意識の問題、生死観なども考えているところです。

―― 先生にとって「名作」とはどんなものでしょうか。

今村：例えば、夏目漱石は、中・高・大学生、結婚した頃、そして今というように、それぞれの年代によって読み方が変りました。このように人生経験と共に読みに変化をもたらすというのが名作の特徴と言えると思います。また、現実のドロドロした煩悩の世界を見すえ、虚と実の合間を美へと昇華するものが名作と呼ばれる文学作品なのでしょうね。また、文学的使命というのがあるとしたら、それは人間としての問題に対して普遍的なものを紡ぎだすことだと思うんですね。ただ最近の文学は、死とか、善悪やモラルを超えたところに存在する人間の姿を追究するよりも、目先の近すぎる部分的なことを扱っているものが多いように思います。

――近年の若年化する「殺意」を、文学研究の立場からどうお考えですか。

今村：作家は人間が秘めている「狂」や「思」や「殺意」をいろんな形で作品化しています。夏目漱石や芥川龍之介、川端康成などの作品を通して私が考えていますことは、こうしたことの要因が、幼少期の母親との係り方にあるということです。漱石は歓迎されぬ子供としてこの世に生を受け、生後間もなく里子に出された上、2歳前には塩原家の養子になります。また、芥川龍之介は生後9ヶ月で母親が発狂したため母方の実家で育てられます。川端は3歳で父、4歳で母、8歳で祖母、11歳で姉と次々と肉親の死に会い、１６歳の時祖父も亡くなり孤児になります。こうした作家たちは作品を書くことで幼少期の家庭環境の癒されない思いを昇華していたとも言えるのではないでしょうか。

―― 汀女研究のきっかけをお聞かせください。

今村：10数年前に、汀女主宰俳誌『風花』の、熊本支部長の講演で岩下ゆう二さんの話を聞く機会がありました。その折、汀女の俳句とその生き方に魅かれたのがきっかけです。汀女が母親という立場で作っている句に接し、こうした日常茶飯のことをさりげなく5・7・5にするのが俳句なら私にもできるのではないかという思いに駆られ、句作りを始めたのですが、それと同時に汀女の母として妻として俳人としての生き方に興味を持ちまして、まだ研究という形では取り組みがなされていないこともあって、郷土の女流俳人の研究ということで始めたのです。

――熊本と俳句のつながりについてお教えください。

今村：そもそも熊本は、夏目漱石によって直接、俳句の種を蒔かれた土地柄なんですよ。漱石は五高の生徒たちに俳句を教えました。共に「紫溟吟社」という俳句の会をつくりまして、それを基点に、熊本の俳句界はとても盛んになったんです。いま、学校教育の現場では国語の時間が減り、俳句はほとんど扱われなくなっているのではないかと懸念していますが、総合教育の時間に俳句をもっと取り上げていただきたいとあちこちで力説しているんです。自作俳句や、有名な俳句を絵にすれば、美術に繋がるし、俳句を詠みに山や川に行く、そこで植物に触れ合えば、理科にも興味を持つ、そんな風に多面的に取り組むことは可能だと思うんです。全国的にみて総合教育に俳句を取り上げている学校もあります。漱石来熊100年を記念して「草枕全国俳句大会」が始まりましたが、今年から「草枕国際俳句大会」と改称しました。それは世界中の紛争の真っ最中の国からも沢山投句があるからです。女流俳人の中村汀女を生んだ熊本は俳句の発信地としての自覚を持っていいと思います。夏目漱石が1年滞在した松山は、いろんなイベントをして「俳句の町」としてPRしています。漱石は4年も熊本にいて熊本を多く詠んでいるのにと思うと、熊本県人はPRが下手なのか、持って行き方が下手なのか少し残念な気がします。でも、現代美術館ともども、熊本の文化を外に向かってアピールしていかなければと思います。

――ありがとうございました。

（8月15日、於：熊本市現代美術館、聞き手　南嶺　宏）

今月の展覧会

- ロンドン　テート・モダン　「バーネット・ニューマン」展(9.19～2003.1.5)
- パリ　ポンピドー・センター　「ダニエル・ビュラン」展(～9.23)
- シカゴ　ミュージアム・オブ・コンテンポラリー・アート　「アンドレアス・グルスキー」展(～9.22)
- ミュンヘン　ハウス・デア・クンスト「Jana Sterbak: I can hear you think」(～9.22)
- 大分県立芸術会館 (0975-52-0077)　「印象派からマティスまで」展(9.1～9.29)
- 坂本善三美術館 (0967-46-5732)　「坂本善三と阿蘇　外輪山を中心に ～自然から教わったこと～」展(9.4～10.6)
- 福岡市美術館 (092-714-6051)　「やなぎみわ展」(9.3～10.14)
- ハウステンボス美術館 (0956-27-0001)　「シニャック展」(9.6～10.14)

今月の4コママンガ

「小柄ゆえに」

→

イラストレーション／はとうあやか

編集後記

アートキッスレターを創刊したのは昨年7月。確かに、最初は素人の作品にコメントなど、という声も聞かれました。しかし、私たちは一人一人の人生を投影したような、無数の真摯な作品に心打たれ、感じ、そしてさまざまなことを考えさせられてきたのです。そして、その作品の前での内的な精神活動は、実は世界的といわれるようなアーティストの作品の前での体験と、何ら変わることがないのです。いよいよ熊本市現代美術館が開館します。ＡＫＬもますます充実させてまいります。力作を待ってます。

（学芸課長　南嶌　宏）

寄稿者紹介

兼城 昌山 (S.K)
Shozan Kaneshiro
書家で最初の文化勲章を受章した西川寧さんが、約50年前に「書はデザインである。」と言った。今も生きる言葉である。

森山 淡草 (T.M)
Tansou Moriyama
上野の国立博物館で、現代書壇の巨匠「西川寧展」を観た。恒例の「朝日二十人展」で鶴亀みの作品さえも息をのむほどの新鮮な感動を覚え、改めてその巨大さを認識した。

田代 晃三 (K.T)
Kozo Tashiro
飯光展で高校生の優れた作品をゆっくり見た。彼等の才能が花開いて行くのを見続けたい。

学芸員紹介

本田 代志子 (Y.H)
うれしい驚きに出会える美術館になればと思っています。

藏座 江美 (E.Z)
どんなに忙しくても秋風を感じる心は忘れないでいたいものです。

金澤 韻 (K.K)
開館日のことを考えると、今からわくわく。忙しさも何のその！？

坂本 穎子 (A.S)
とうとうあと1ヶ月。この号がでる頃には潮騒の聞こえるころです。

富澤 治子 (H.T)
オープンへと邁進する日々。ボランティアさんの助けあってこその開館と実感します。

発行元／ART KISS LETTER　アート・キッス・レター Vol.15　2002年9月15日発行　◎無料◎
編集人／田中　幸人
編集長／南嶌　宏　　担当／富澤　治子
印　刷／熊本県印刷センター協業組合　　デザイン／松永　壮デザイン事務所
発　行／熊本市現代美術館　〒860-0845　熊本市上通2-3
TEL.096-278-7503　FAX.096-359-7894